

神戸トリエンナーレ 2017

基本計画書 Ver.0

■はじめに

2013年12月7日に開催された、神戸ビエンナーレをさらに盛り上げるために「100人のアーティスト」が集まる会にて出された意見をもとに、次回の神戸ビエンナーレの「基本計画書 Ver.0」をまとめた。

「Ver.0」(バージョンゼロ)とはまだ本計画書が試作段階であることを指し示す。また、この「Ver.0」を叩き台としてアーティスト、神戸市民、行政と公開プレゼンやディスカッションを実施して、より良い意見を反映して適時、バージョンアップしていく。参加交流型かつ進行形プロジェクトであることの表明でもある。

【基本方針】

「アートによってまちに持続的な生命力の種を蒔く」

全国各地でアートによる地域活性化として、集客・観光促進を目的としているものがほとんどである。しかし、地域活性化としてアートを用いてくる意味はどこにあるのだろうか？集客、観光も地域活性化にとっては大切な要素であるが、そこにアートがある意味はその様々なプロセスにおいて地域が将来に向けて、新たな発見、気づき、人とのつながりなどを通して自律した生命力を持てるきっかけとなっているかが、重要なポイントではないだろうか？先日の会でも、アートの力の何を信じてビエンナーレを行っているのかわからないという意見が多くあった。これは、イベントとしての目的が明確であっても、アートイベントとしての目的が伝わっていないということではないだろうか？基本方針では、アートのどの力を可能性として認識して、まちの活性化へ活かそうとしているのか、その点を明確にした形でまとめたい。アートはすでに単なる鑑賞するための作品とみるのではなく、人間の本来のエネルギーを呼び起こす活動としての可能性に着目したい。

1. アートはまちの資源を発見する

アートによって神戸のまちの資源をあらためて見つめる機会とする。その中で新たな発見や再発見のきっかけをアートが創り出すことによって、まちの資源を有効活用した新たな活動（経済活動はもちろんのこと地域活動なども含む）を起こすことを目的とする。

2. アートは人をつなげる

アートにより鑑賞者としての人を多く集めるという目先の目的ではなく、アートによって多くの人を社会、地域にとっての第3者でなく当事者にしていく。これは社会、地域で脆弱になりがちなりアルなコミュニティを再生させることも目的としている。アート作品の制作過程への参加、作品管理、作品保存などを通して、作品と社会、地域との関係性を共に考える中から、市民と市民のつながりを創る。さらにそこでつながった市民同士による創造的活動も支援していくことで、持続性のある創造的地域力としていく。それがまちの姿としての創造都市の実現であり、さらに創造的人材の集積につながっていくものとする。

3. アートは新しい視点、問題提起を行う

アートによって社会や地域の課題発見等を行い、それをきっかけにその解決に向けた新たな活動を起こさせる機会とする。社会や地域における課題を考えた時に盲点となっていることはないのか？地域の課題や弱みとなっているものが、逆に強みにすることはできないのか？様々な視点で社会や地域を見つめる機会とし、その解決に向けた試みを積極的に行っていく。

4. アートは人の感性と想像力、創造力を豊かにし、生きる力を育む

人は元来創造的な生き物である。その創造が意味あるものにするためにも、創造力と同等に想像力も重要である。そのどちらに対しても、アートは何かしらの形で「機会」を与える役割を持ち、その機会を起点に人が何かを感じ、考えた時に、創造力（想像力）の芽が生まれる。この芽を育てることが「生きる」ことであり、都市に生命力を与えることである。そのため、アート鑑賞だけでなくワークショップ等の体験機会を積極的に設ける。

5. アートは「人とは何か？まちは何か？」を考えさせる

そもそもなぜ、アートが存在し、そのアートが地域活性化にとってどう有効なのかを常に疑問を投げかける機会ともしていく。アートを通して人とは何かを考え、さらにその人が暮らす地域や社会とは何のかを考える機会にする。いろんな地域で安易にアートによる地域活性化が言われているが、そもそもそこで言う地域とはどんな姿を目指しているのか？あるいは活性化とはどういう状態を活性化と言うのか？そこを深く掘り下げて考えることなく、アートを用いてくるだけでは何の意味もない。トリエンナーレでは、市民とともに考える場を積極的に設けていく。

【提言1】ビエンナーレ方式からトリエンナーレ方式へ

これまでビエンナーレ方式で開催をしてきたが、思い切った見直しや新しい試みされてきていないといった指摘の声が大きい。ビエンナーレ、トリエンナーレはこうした時代時代の声も踏まえて、絶えず新たな視点での見直しと挑戦を繰り返す場でなければならない。また、新しい問題提起や視点といったアートの力を最大限活かすためにもビエンナーレ方式からトリエンナーレ方式へ変更を提案する。次回開催を2016年としつつも、2017年が「神戸港開港150周年」であることから、2017年は「神戸トリエンナーレあとのまつり2017」を開催する。

■開催時期（仮案）

2016年10月1日（土）～11月27日（日）計58日間

※また2017年10月28日（土）～11月26日（日）計30日間に「神戸港開港150周年」に合わせて「神戸トリエンナーレあとのまつり2017」を開催する。

【提言2】コンテナ展示を廃止して地域展示へ

展示場所については、マンネリ化の声が多かったコンテナ展示はすべて廃止し、評判のよかった海上アートは継続する。なによりも地域資源の再活用を主眼に置いたアート展示を目指す。アートと場所の関係性を重視する声が多くあり、場所の選択は、アートイベントの目的、意図に大きく関わることであると考え。開催場所については、今後の日本が抱える人口減少社会、超高齢化社会に対してアートは何ができるのかを念頭においた選定を行う。また、開催場所については、神戸の持つ多様な地域特性を活かしていくために、1回毎に変

更していくことを原則とする。※例えば、2020 年は、北区を中心に都市と田園、温泉地域を水平的視点から「人が生きる場は都市型だけではない？」をテーマに考える機会とする。2023 年は、垂水、須磨エリアを中心に、暮らしを豊かにする海との関係性をアートを通して考える機会とする・・・などなど。

■開催場所案（仮案）

地下鉄海岸線沿線（駅を中心とする 10 エリア）

- | | |
|---------------|--------------------------------------------------|
| ①三宮・花時計駅エリア | デザイン・クリエイティブセンター神戸及び周辺での展示 |
| ②旧居留地・大丸前駅エリア | 旧居留地にある歴史的建物を中心にした展示 |
| ③みなと元町駅エリア | かもめりあから遊覧船による海上アート、メリケンパークの階段ベンチを活用した恋人気分増幅アート展示 |
| ④ハーバーランド駅エリア | J R 駅等の構内及び周辺高架下を使った展示
周辺ホテルの宿泊部屋内でのアート展示 |
| ⑤中央市場前駅エリア | 市場の食材と連携した野外屋台アート展示 |
| ⑥和田岬駅エリア | おかんアートとの連携 |
| ⑦御崎公園駅エリア | 公園での野外展示等 |
| ⑧苧藻駅エリア | 長屋アート展示 |
| ⑨駒ヶ林駅エリア | 市場、銭湯等でのアート展示 |
| ⑩新長田駅エリア | 商店街及び再開発ビルでのアート展示 |

※地下鉄車両：各会場をつなぐ動くアート会場と位置づけ、アートパフォーマンスなどを展開

※チケット価格、販売所など

パスポート：大人 1500 円（乗船券付）

インターネット及びコンビニ、地下鉄海岸線各駅等で販売

※連携として

2017 年の同時期に開催される瀬戸内国際芸術祭に参加し、パスポートの共通利用を可能にする。

「KOBE ART MAP」に参加するギャラリーと共催展示を行うなど。

【提言 3】多様なアーティストと地域と市民とを結びつける 参加交流型のトリエンナーレへ

これまでのビエンナーレでは、地域や人との関係性が弱いという声があったので、より神戸らしいトリエンナーレとするためにも、地域資源や市民との結びつきを重視した展示を行う。また、これまで多種多様な展示ジャンルについては一定評価されてはいるものの、展示の際にそのジャンルを明確化してきたために、逆にジャ

ジャンル毎の縦割りを強調し、既存のジャンルを越えた挑戦がしにくい状況であった。よって、よりジャンルに拘らない多種多様な展示に努めるため、複数のアートディレクター方式と招待作家による公募コンペの混合方式を採用する。

■展示&展開方法（仮例）

①アート驚くまち歩き

開催地域を知るためのまち歩きを行う。案内役は、地域住民を中心に行う。トリエンナーレ参加アーティストは、まち歩きへの参加を義務化し、そこから自身の展示場所、展示内容等を考える場とする。

②アート井戸端会議

開催エリア毎に開催する。その地域の関心を高めるために、その地域に起こった事件が掲載された新聞記事や地域を題材にした小説、雑誌を持ち寄り、地域ネタを持ち寄り、参加アーティストと駄弁り合う。会場は、地域の喫茶店や飲食店、あるいは居宅の一部を開放していただく。

③住み開き

地域住民の居宅の一部を開放していただき、そこをアート展示やパフォーマンス会場とすることで、アートと地域の関係性を深める。

④地域と人とアート展示

参加アーティストには上記のプロセスの中で感じとった地域とそこにいる人との関係性の中で自身の作品制作を考えていただき、制作はすべて現地制作又は現地に関係した作品制作を義務付ける。また、展示までの制作期間もできるだけ公開するとともに、市民との協働制作機会をできるだけ設けるよう努める。

⑤招待作家の公募

アート展示には国際的、全国的に活躍されているアーティストを招聘する。その招聘アーティストをアンケート公募し、上位 30 名の中からディレクターが選定する。

⑥招待作家によるアーティスト公募

ディレクターに選定された招待作家が審査員となるアーティスト公募を行う。各賞、アーティストの名前が出た賞とする。

【提言 4】市民サポーター制度の拡充

市民参加としてサポーターに対する扱いについて問題視する声が多くあった。サポーターを協働者として位置づけ共に創り上げるトリエンナーレとすることが重要である。多数のサポーターの参加は、トリエンナーレの当事者を増やすことであり、そこにある創造的波及効果と可能性が非常に大きく、都市のトリエンナーレとす

る上でその重要性は事情に高い。サポーターとして広く市民参加を求め、サポーター企画事業も選考の上、実現していく。

【提言5】 プロデューサー、ディレクターは固定化せずに 柔軟かつ多様性を担保した運営体制を

これまでアートの専門家の参加がなかったため、しっかりしたキュレーションが行えていないとの声が多かったため、実績にある人をディレクターとして就いていただく。また、プロデューサー、ディレクターの固定化による弊害を指摘する声が多かった。アート本来の柔軟かつ多様な視点を活かして上でも、体制は1回毎に変更することが望ましいと考える。各ディレクターが担当エリアを持ち、そのエリア内のディレクションを行う。また、各エリア間の総合調整と各エリアをつなぐディレクションを総合ディレクターが行う。また総事業費は2億円を想定。